

ISSN 0454-8302

神奈川歯学

KANAGAWA SHIGAKU



第48巻 抄録集 2013年学会総会
Vol. 48. Abstracts. November 2013

神奈川歯科大学学会雑誌
The Journal of the Kanagawa Odontological Society

上顎洞底挙上術の新しい概念

A New Concept of Maxillary Sinus Floor Elevation

○山内大典, 渡辺孝夫, 今富収治, 浅井澄人, 高橋常男(画像解剖)

【目的】 イヌ前頭洞をしいた一連の洞底挙上術実験より以下の新しい概念を提案した。 1. 洞内のインプラントは洞内既存骨より4mm領域以内に置くこと。 2. インプラントはHAコーティングを使用すること。 3. 洞内新生骨との骨結合獲得には、植立部既存骨量は最低1mm以上あること。 4. 骨補填材は必ずしも必要ない。 5. 2次手術は6ヶ月以上、免荷期間は9ヶ月以上置くことなどである。本研究ではこの概念を臨床応用し、その有用性について検討した。【方法】 症例は男性5例、女性10例(総数15例)、植立インプラントは合計24本。年齢は52歳から68歳(平均 60 ± 5.4 歳)。手術期間は2003年9月～2010年7月。手術前の上顎臼歯部歯槽骨頂からサイナスまでの高さはCT画像のクロスセクショナル像より1.13mmから6.18mm(平均 3.07 ± 1.8 mm)であった。全症例静脈内鎮静法を行い、補填材なしで、上顎洞内側壁に沿わせるようにインプラントを植立しカバースクリューを装着し、縫合を行った。全症例2回法を行った。【経過】二次手術までの待機期間は平均 6.1 ± 1.2 カ月(最少4カ月, 最大9カ月)であった。術後から待機期間中に上顎洞感染を疑う所見はなかった。二次手術時に、ペリオテスト値は平均 0.4 ± 1.5 (最少-2, 最大03)と良好であったため、仮歯にて咬合負担を与えて経過観察を行い、最終補綴物を装着した。咬合荷重を与えてからの観察期間は平均 47 ± 21 カ月(最短16カ月, 最長77カ月)であった。全症例ともに現在まで良好に経過している。【考察および結論】上顎臼歯部歯槽骨高度吸収症例にインプラントを埋入する場合、洞底挙上スペースに補填材を填塞することが一般的な手法となっている。しかし、一旦感染すると補填材が感染源となり炎症を助長し、遷延化するとリカバリーが困難になる。今回の24洞/20症例の結果から、上顎臼歯部歯槽骨高度吸収症例であっても、本概念を応用することにより骨結合面積の増加が期待され、十分に臨床応用可能と考えられた。